

日本から7時間、アラスカ最大の都市アンカレッジに到着(アラスカの州都はジュノー市)。米国の北西に位置し、米国50州の中で最大の面積を誇るアラスカは、日本から最も近い米国です。我々がアラスカを訪れた目的はオーロラ観測。アラスカ州立大学地球物理学研究所の調査によると、アンカレッジで年間100日、フェアバンクスではなんと年間平均243日もオーロラ現象が起きているとのこと。そこでアンカレッジの市内観光はそこそこに、空路アラスカ第二の都市フェアバンクスへ。

アラスカの中央に位置し、偉大なる大地アラスカの「黄金の心臓(Golden Heart City)」を自負するフェアバンクス市は、大河ユーコンの支流タナナ川とチェナ川流域にあつて、町は平野にゆったりと広がり、樺やエゾ松の森となだら

かな丘陵地が雄大な景観に優しさを加えています。到着後、専用車にてフェアバンクスの北東約96kmに位置するチェナ温泉へ。

チェナ温泉には2泊しました。昼までたっぷり寝だめしてから、スノーモービルで雪原を走り回ったり、ジャクージや温泉プールを楽しみ、夕食後はバーで宿泊客らと一緒に飲みながら深夜まで騒ぎ、そして真夜中の1時から屋外でオーロラ観測です。春先とはいえ夜は氷点下10℃以下と厳しい寒さでした。最初の晩は雲に覆われて観られませんでしたが、オーロラを観る最後のチャンスとなった2夜目の深夜2時頃と4時頃に、月と星の輝きを奪い取るように静寂に包まれた夜空から舞い降りてくる光の幕を体験できました。天候に恵まれて本当にラッキーでした。



オーロラ観測をしたチェナ温泉



宇宙からのメッセージを思わせるオーロラ(イメージ)

4時過ぎまでオーロラを観測していたので、就寝せずに朝食を食べ、早々にチェックアウト。専用車でフェアバンクスへ戻り、帰路はフェアバンクスが始発のアラスカ鉄道に乗り、アンカレッジまで7時間の鉄道の旅。アラスカ鉄道は晩春から初秋までの夏季限定の運行で、我々は運良く運行し始めたばかりの列車に乗ることができました。しかしながらピーク時とは違い短い3両編成で、展望車はなく、車内販売などのサービスありません。しかも車内は禁煙で、違反すると罰金がなんと2,500ドル。当時ヘビースモーカーだった私としては3両編成で乗客もわずかしかないため常に車掌に監視されているような気分でした。ツンドラの広大な大地を眺めながらの列車の旅は、針葉樹林や白樺の

森、きらきら輝く湖など、ダイナミックな風景を堪能しました。昼頃、デナリ国立公園を通過した際には、車窓から北米最高峰のマッキンリーの雄姿が見られました。マッキンリー山は冒険家植村直己が1984年2月12日に厳冬期単独登頂では世界初となる登頂を果たした山で、その日は彼の43歳の誕生日でした。翌2月13日に行われた交信以降は植村直己と連絡がとれなくなってしまいました。彼の遺体は発見されおらず消息不明のまま現在に至っています。

北半球でオーロラを観測できる地域はいくつかありますが、フェアバンクスは地理的な関係から降水量が少なく晴天率が高いことが証明されていますので、オーロラ観測には最高のロケーションということになります。オーロラ現象



期間限定で走るアラスカ鉄道



車窓から眺めるマッキンリー山

を地上から確認するには、①晴天で地上とオーロラの間雲がないこと、②光を認識することができる暗さ(夏の白夜の時期や街の明かりのある所は難しい)の2つのポイントが必要です。

アンカレッジから空路コペンハーゲンで乗り継ぎ、ポルトガルの首都リスボンへ。ヨーロッパ観光のメインは、イベリア半島の2国(ポルトガルとスペイン)です。そこで、「地球の歩き方」のポルトガルを執筆したナザレ在住の私の友人(須田さん)にリスボンで会い、両国の旅行プランを練ってもらいました。

ポルトガルの観光は、首都リスボンを起点としました。リスボンの街は、ヨーロッパの最西端に位置しているという地理的条件から、大西洋の雄大な景観をほしのままにしています。かつてこのリスボンの港から、大いなる野望を抱いて幾多の冒険家が大洋の荒波に乗り出して行きました。市内観光は、大航海時代のエンリケ航海王子とヴァスコ・ダ・ガマの偉業を称えてマヌエル1世によって建造されたジェロニモス修道院、町はずれにあるベレムの塔、海岸沿いにある発見のモニュメントを訪れました。そして夜はファドディナー。ファドとは「運命」とか「宿命」といった意味で、リスボンに代表さ



発見のモニュメント

れる港町から発祥したといわれるポルトガル人の心の歌。伴奏には通常のギターに加えて「涙の形をしたギター」とも呼ばれる丸い胴のポルトガルギターが用いられ、哀愁に満ちた高音の調べを奏でます。



ファドの調べ

リスボンのロッシオ駅から列車に乗り、レイリア駅からバスに乗って、約3時間でローカル色豊かな小漁村ナザレに到着。ナザレはプラタ海岸にあり、独特の風俗をもっています。この町の女性は黒いダブダブのスカートをはき、男性はタータンチェックの上下に毛糸編みの三角帽子をかぶっています。ナザレもリスボンに負けないほど坂道が待っていますが、私の歩みをとめるものではなく、擦り切れた石畳の道は促進剤のようにエネルギーを与えてくれました。丘から眺めると、街には赤い屋根瓦が印象的な家々が立ち並んでおり、砂浜には鮮やかな色のフェニキア風ボートが並べられていました。昼は粹に大西洋を見ながらテラスで食事。イワシの塩焼や茹でたエビなど、ビールやワインによくあうメニューに舌鼓。食後、ナザレからバス

に乗り、城壁に囲まれたかわいらしい町オビドスへ。ここは歴代の王妃が気に入って直轄地になっていたというだけあって、白壁と花と赤煉瓦の小道がとても奇麗な小さな街でした。

北緯38度47分、西経9度30分にあるロカ岬はユーラシア大陸最西端の地で、「地の果て、海のはじまる場所(onde a terra se acaba e o mar começa)」の碑が建っています。私たちは高さ140mの断崖から、眼前に広がる大西洋からの強い風をうけた後、小さな観光事務所へ行き、名前と日付入りの最西端到達証明書 *certificado* (有料)を作成してもらいました。裏には今年何人目の訪問者かを示す番号が書かれています。私の *certificado* の番号は1829番(1989年4月27日)でした。



赤い屋根が印象的なナザレの町並



ユーラシア大陸最西端のロカ岬



丘の上に聳えるペナ城

リスボンの西北にある古くて美しい町シントラへは、リスボンのロッシオ駅からシントラ行きの列車で45分。見どころは、かつて王宮だった宮殿と丘の上に聳えるペナ城。マニウエリン、ムデハル建築様式が融合している宮殿は、共和制宣言(1910年)の直前まで使われていました。最も広い「白鳥の間」が美しく、天井に描かれた27羽の白鳥はみんな違ったポーズをしています。バルコニーからは大西洋が見渡せました。小高い山の上に建つおとぎの国のような優美なたたずまいのペナ城へは、若さゆえに麓から頑張って歩いて行きましたが、タクシーや馬車でも行けます。

ポルトガルはイベリア半島に対峙するスペインと比べて、ラテン系の華やかさはなく、どことなく地味な印象を持つかもしれません。しかし、ポルトガルには他のどの国と比べてもひけを取らない豊かな郷土性、地方性があり、見渡す風景も何故か懐かしさを抱かせてくれるものばかりでした。また海洋国だけあって、魚料理は豊富で、その素朴な味は旅人の疲れを癒してくれます。

リスボンから夜行で、スペインの首都マドリードへ。朝9時25分、マドリードの中心にあるアトーチャ駅に到着。着後、須田さんの指示

に従いスーツケースを駅に預けて、グラン・ビア通り界隈でホテル探しを。ポルトガルはホテルリッツに宿泊しながら観光しましたが、これからは移動しながらの観光のため、旅先では真っ先に宿を確保しなければなりません。グラン・ビアは市内を東西に走る目抜き通り。ドン・キホーテ像のあるスペイン広場から、東は噴水のあるシベールス広場まで高級商店やホテルなどが並んでいます。街はここを境に南北に分かれ、北はスクラップアンドビルドの新市街、南側一帯マヨール広場にかけてが旧市街で、私たちが日夜ほつつき歩いたところです。王宮やゴヤのバンテオンもさることながら、中世の宗教画にはじまって、スペイン絵画の全貌をみごとに知らせてくれるプラド美術館は必見です。グレコ、ベラスケス、スルバラン、ゴヤなどのスペインが誇る巨匠たちについては、ここを見ずして語ることはできません。グレコの「キリストの磔刑」、ベラスケスの「ブレダの開場」、あまりにも有名なゴヤの「着衣のマハ」「裸体のマハ」、さらにはこれら3巨人の名声にかけて日本ではなじみやすいものの、スルバランの「静物」も見落とせません。また、プラド美術館まで来たら近くの19世紀博物館にあるピカソの「ゲルニカ」もお見逃しなく。



スペインが誇る巨匠たちの絵画を展示しているプラド美術館

アトーチャ駅はアンダルシア方面やトレドへ行く列車の出る駅ですが、バルセロナへ行く列車は市内の北東にあるチャマルティン駅から出ます。22時50分発の夜行列車に乗り、翌朝8時50分にダウンタウンにあるテルミノ駅に到着。バルセロナの街は3年後(1992年)に開催されるオリンピックに向けて盛り上がっていました。そして、バルセロナといえば何とんでもなく、バルセロナが生んだ19世紀の天才建築家アントニオ・ガウディです。ガウディは1852年に生まれて1926年に亡くなりましたが、その間、故郷バルセロナにグエル公園、ミラの家(ペドレラ)、グエル邸、グエル地下聖堂など数多くの作品を残しました。しかし、彼の名を近代建築史にとどめることになったのは、彼の畢生の大作といわれるサグラダ・ファミリア教会です。「聖家族」を意味するこの教会は、名前の語感とは裏腹に、極めて特異な形でバルセロナの中天に聳え立っています。まるで大きなトウモロコシが4本空に突っ立っているような奇妙な教会は、驚くことがまだほかにもあって、1884年に始まった建設作業が約1世紀も経った現在、なお続けられており、さらに完成までこれから200年はかかるだろうといわれていることです。スペイン人は気が長いと驚き呆れてしまいます。また、この偉大な建造物の資金源は



天才建築家ガウディの聖家族教会

見学者の払う200Ptsの入場料(当時の金額)とたまに来る寄付金だけで、特定宗派の教会のために政府からの補助は一切無いということで、そ

のため従業員の給料すら満足に支払われていない状況なのだそうです。私は狂気の塔のひとつに登り、三方を丘に一方を海に囲まれた美しい町バルセロナの眺望に感激するとともに、自分が高所恐怖症であると知りました。私にとって、このバカげた建築物を見るだけでもバルセロナに来る価値はありました。

闘牛は春3月、バレンシアの火祭りを皮切りに、スペイン全土の闘牛場で日曜・祭日ごとに秋まで行われます。血なまぐさく、残酷な感じも受けませんが、なにせスペインの国民的行事なので、バルセロナの闘牛場で見物しました。スペインは何事も時間にルーズなお国柄なのですが、闘牛だけはピッタリと時間どおりに始まります。というのは、円形の闘牛場に夕方、西日が強く射して、場内が“光(sol)と影(sombra)”に二分されたまさにその時間に、ファンファーレとともに始まるからです。ソル(sol)は西日のモロにあたる場所で、暑いうえに逆光になってよく見えず、写真などを撮るのはまるでダメ。ソンブラ(sombra)は影の部分だから見やすく、正面になるので闘牛士の動きやショーの全体がよく見えます。ショーは3人の正闘牛士(マタドール)が3頭の雄牛を殺す過程を見せるわけですが、結局は強い雄牛(500~700kg)をまだ元気がうちに、いかに華麗に刺殺するかにかかっ

ています。めくら馬に乗ったピカドールが槍で牛を弱め、次ぎにバンドリリエーロが2本ずつもりを打ち込み、牛の動きを鈍くさせます。いい技を見せたマタドールは殺した牛の耳を1つ、さらにはいい場合は2つもらい、最高級の闘牛士は、尻尾までもらい場内を一周します。この際に花束から、ワイン、パンティまでスタンドから投げられます。その熱狂もまた見に行く価値のあるものでした。

バルセロナから夜行でマドリードに戻り、アトージャ駅を23時に発車する夜行の急行に乗りセビリアへ。私たちは宿泊代をうかすため、長距離移動の際には夜行列車に乗って旅をしました。翌朝8時にアンダルシア地方でいちばん大きな町セビリアに到着。人々は陽気、町には活気、そして街路樹のオレンジの木、ここは明るくて南国的です。ビゼーの「カルメン」、モーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」の舞台となった町セビリアは、スペイン美術史に輝く、ベラスケス、ムリーリョ、バルデス・レアルという3人のバロックの巨匠を生んだ町でもあります。そしてもうひとつ、セビリアに来たならフラメンコです。フラメンコはスペインの代表的な民族舞踏。アンダルシア地方にもともとあった土着芸能と、中世以後渡ってきたジプシーの音楽的才能、大道芸人としての素質がうまく



スペインの国民的行事である闘牛

ミックスされて今日に至ったものです。それゆえか、マドリードのほかではセビリアやグラナダなどアンダルシアの都市でいいフラメンコのショーが見られますが、なかでもセビリアが一番とのこと。フラメンコはタブオラと呼ばれるレストランでもあり酒場でもあり、劇場のようでもある店で行われます。ショーは夜の10時ぐらいから朝の3時ぐらいまで行われ、遅くなるほど本格的なフラメンコが見られます。最前列に座るとよく冷えたシャンパンもそっちのけ、荒削りな踊り子たちが私の目を釘づけに。

セビリアから列車で約1時間、スペインの代

表的な詩人ガルシア・ロルカが「騎士の恋唄」の中で「遙かなる孤独のコルトバよ!」とうたいあげた町コルトバに到着。11世紀、イスラム教徒の侵入により、カリフ王国の首都となったこの町は、当時人口100万を有していたといわれます。それゆえ、この町の魅力は回教寺院(メスキータ)においては語れません。アーケードの装飾が、森林のように連続し、コルトバ・カリフ王朝独特の美を奏であげる幻想的なメスキータとともにメスキータの塔の上からの見晴らしも抜群でした。



スペインの代表的な民族舞踏フラメンコ



コルトバの町並とメスキータの塔

コルトバからバスでグラナダへ。クラナダはアルハンブラ宮殿の丘の麓に開けた城下町で、「アンダルシアの宝石」と呼ばれています。1492年カトリック両王イサベルとフェルナンドは、イベリア半島最後のイスラム王朝の牙城グラナダを攻略し、アルハンブラ宮殿に入城しました。奇しくも同年、コロンブスはここグラナダでイザベル女王に謁見し、西方への大航海の許可と出資を請願しました。女王に受け容れられたコロンブスは、アメリカ大陸を発見し、大航海時代のスペインの栄光は、ここに幕を切って落とされたのです。市の中心のコロン通りの起点には玉座の女王から約定書を受けるコロンブスの銅像があります。グラナダの世界遺産アルハンブラ宮殿へは徒歩で行くことにしました。観光客のためにアルハンブラへの丁寧な道標が街のいたるところにあるので、それに従って行けばよいのです。荘重な「裁きの門」をめぐり城内に入ると、赤みを帯びた堅牢な要塞が(アルハンブラは「赤い城」の意)。王宮の中へ足を踏み入れると、優雅なムーア様式の列柱が並ぶ大理石の回廊があり、中庭の噴水が心地よい水音をたてて落下していました。回廊の周りに

はいくつもの大小の部屋があり、各部屋の壁や天井は彩色タイルで埋め尽くされ、淡い色調のアラベスク文様や垂れ下がるモカラベが施されています。丸天井の繊細な嵌木細工は一見して朝の霜のような水晶の構造を呈し、何と気品に満ち、優雅であることか。往時はイスラムの王侯貴族が美姫たちに囲まれ、千夜一夜の逸楽に現をぬかしたのでしょう。

いつものようにグラナダから夜行列車に乗ってマドリードへ向かったのですが、朝早くにラ・マンチャ地方のカンポ・デ・クリプターナで途中下車しました。カンポ・デ・クリプターナの村には、ドン・キホーテが突進したという風車群が残っているからです。マドリードから南へ約150km、セルバンティスの小説「ドン・キホーテ」の舞台となったラ・マンチャという県があります。何があるというわけでもない乾いた土地に雑草が僅かに生え、今は動かぬ風車と、真っ白な小さな町があるだけです。しかしながら12世紀のアラブの城跡がある丘にたたずんでいる11基ほどの粉ひき用の風車を眼前にすると、まるで物語の世界に入り込んだような気持ちになりました。



華麗なイスラム文化の遺産アルハンブラ宮殿



「ドン・キホーテ」の舞台となった
コンスエグラの風車



エル・グレコの家



ヨーロッパの終着駅アムステルダム中央駅

マドリードで3日あったら、1日はかけて行ってみたい街といわれるのがトレド。エル・グレコの心をとらえてはなさなかった中世の街のたたずまいが、今もそのまま残っています。マドリードのアトーチャ駅から列車で1時間半、駅からトレドの街までは歩いて10分ほど。

しかし、駅からアルカンタラ橋を渡らず、そのまま道に沿って25分ぐらい歩くと絵葉書にあるようなトレドの街が見られます。眼前に広がる風景が、まさにグレコが描く「トレド風景」であるのに驚きました。エル・グレコの家

は19世紀末にグレコの愛好者であった侯爵が再建したとのこと。部屋には古びた暖炉、ポロポロになった椅子などが置かれています。クレタ島で生まれたグレコは、トレドに来て以来ここに住みついていたそうです。グレコはスペイン人ではなくギリシャ人で、グレコとはスペイン語で「ギリシャ」を意味します。

マドリードから空路オランダの首都アムステルダムへ。アムステルダムの顔は“ヨーロッパの終着駅”とのこと。アムステルダム中央駅からまっすぐにのびるダムラーク大通りを歩いて

いくと 10 分もしないで白い塔(解放記念碑)の見えるダム広場に着きます。このダム広場に世界各国から若者が集まってくるのも、こんな顔にひかれてなのでしょうか。昔は重要な交通手段として、今は世界から人を集めている観光資源として、この町は昔も今も運河でもっています。そこでガラス張りの観光船に乗って水上から古都を楽しみました。アンネ・フランクの家も運河沿いの 17 世紀家屋の典型的なひとつでした。

“運河と風車とチューリップ” そんなイメージを持って、夜にアムステルダム中央駅へ行くと、風に舞う紙屑、暗い闇の中におびしげに明滅するネオン、インフォメーションの辺りに屯するいかがわしい客引きの男たちと、思わずギョッとする光景を目の当たりにします。古くから各国の水夫が出入りし、「飾り窓の女」を抱えるアムステルダムのもうひとつの顔として、港町特有の一種いかがわしい、国籍不明の、それでいて解放された雰囲気漂っていました。「飾り窓」の場所は、ダム広場の東側「Krasnaplsky Hotel」の裏を抜けて運河にぶつかったら左折します。そこから Nieuw Market の辺りまでの 2

本の運河沿いがその地区。いわゆる飾り窓の中や、アパートのドア前に立つ女性たちがあっけらかんと商売しています。本当にピンクの照明の飾り窓になっているのは楽しいかぎりですが、そこからウィンクする女性たちは白人ばかりか黒人や黄色人種もおり、しかもピンからキリまで。窓越しに会話はできませんが、夜陰に見えかくれする半裸の女以上に刺激のある言葉はあるのでしょうか。お客が入っているところはカーテンがおりています。一見の価値があると思い、1 時間半くらい歩きまわって多少毒気にあてられた感もありましたが、あっけらかんとして陰湿ではないし、面白いところでした。ちなみに朝早くに界限を歩いてみると、どの店も店内にドーベルマン数匹を放し飼いにしていました。

アムステルダムから 2 時間もあれば行って帰れるところで風車を見ることにし、ゼーンセスカンスへ行きました。アムステルダム中央駅から列車に乗ること 20 分弱、Koog Zaandijk 駅で下車し、少し歩くだけで風車に。ここでは風車以外にも羊の放牧やおとぎの国のような家も見られます。帰りに駅前でおランダ名物の木靴をお土産に買いました。



ゼーンセスカンスの風車

アムステルダム中央駅から夜行列車に乗り、デンマークの首都コペンハーゲンへ。列車はすべて中央駅に着きます。市内散策は、中央駅前の通りを右に行き、市庁舎広場から歩行者天国になっているストロイエをぶらぶらとコンゲンス・ニュートー広場まで歩き、そこから城跡まで歩いて海の方へ出るとその先が人魚の像で終了。いわゆる観光のためのエリアはすごく狭く、中心になる市庁舎広場から2km以内のところには大方の見どころがあるのです。人魚の像は、アンデルセンの童話の世界に浸るといふより、そのあまりの小ささにあっけにとられました。そして、海の向こうに見える港やドックがロマンをぶちこわしています。オランダといえばチューリップというわりにはチューリップを見かけませんでしたが、コペンハーゲンの公園は色とりどりのチューリップの花で埋め尽くされていました。コペンハーゲンは人魚の像とチボリ公園で知られており、チボリがあるからコペンハーゲンに来るといふ人もいるぐらいです。大人の遊園地チボリの開園期間は5月1日から9月中旬の日曜日まで。そこで私たち一行は入園し、種々の乗り物にトライしました。しかし、楽しいのは昼よりも夜。野外ステージのショーやコンサート、モダンバレエなどがあちこちで始まり、真夜中12時まで賑わっています。ここでヨーロッパ最後の夜を満喫しました。

翌朝コペンハーゲンから空路タイの首都バン



アンデルセンの名作童話にちなんだ人魚の像

コクへ。スカンジナビア航空はデンマークからタイへの定期便がないので、ラウンドチケットはスカンジナビア航空の提携会社であるタイ国際航空となります。バンコクから成田も同様にタイ国際航空です。バンコクで同級生2人と合流し、ビーチリゾートで有名なプーケットへ行き、男6人で目一杯リゾートライフをエンジョイしました。



プーケットのビーチ

25 日間の世界一周の卒業旅行は、私にとって青春時代のかげがえのない貴重な思い出となりました。

ジュール・ヴェルヌ(1818-1905)は、フランス西部、ロワール河畔のナントで生まれ、幼いときから科学への好奇心と冒険心を持ち、11歳のとき従妹に珊瑚の首飾りをプレゼントしようと、見習い水夫として船に乗り込もうとして、家に連れ戻されたというエピソードがあります。

1863年に発表した「気球旅行の五週間」で一躍世界の人気作家となり、以後「15少年漂流記」「海底二万哩」「地底旅行」「八十日間世界一周」など驚異の旅シリーズを次々と発表しました。今思うに、私の旅行の原点は小学生のときに夢中で読んだヴェルヌの作品であり、特に「八十日間世界一周」に感化されたのでしょう。

それでは来年も元気に旅を続けます。読者の皆様、良いお年をお迎えください。